GEO-COMMUNICATION Working Paper No.7
June 15, 2013 ISSN 2186-9820

地域環境史誌編纂と地域情報データベースの事例

東　昇
京都府立大学

はじめに

本稿は、Geo-Communication（ジオ・コミュニケーション）研究の一つの柱になると考えられる「地域環境史誌編纂」に関して先行事例を検討する。ここでとりあげる事例は、①自治体を中心とし、②歴史・地域資料に関するデータベースのなかで、③「地域情報データベース」の枠に含まれると判断できるものを選択した。この「地域情報データベース」とは、地域に膨大に存在する文化遺産を、現在・未来の住民のための地域情報として有効に利活用するためのデータベースと定義する[1]。そして「地域環境史誌編纂」の重要な地域資料といえる写真資料について、近年調査研究が進む愛媛県歴史文化博物館の村上節太郎写真コレクションの概要を紹介する。

1．自治体におけるデータベースの先行事例

まず「地域環境史誌編纂」「地域情報データベース」に関して、参考となる自治体の事例を概観する。数多くのデータベースのなかで、範囲とする地域が広い県立図書館等の取り組みを中心に、特に①収集範囲、検索の多様性、②歴史資料本文のテキスト掲載、検索、③住民参加型という視点から、参考となる事例をとりあげる。

・「信州デジくら」 多様な検索、住民参加、活用事例

長野県が運営する「信州デジくら」は、「長野県デジタルアーカイブ推進事業」の愛称である[2]。長野県の歴史・文化・自然等の貴重な社会的資産をデジタル化して保存する蔵、大切に守り伝えられてきたものや暮らしそのものを、生きた形で次世代へ伝えていく

---

[1] 東昇「京都地域情報・文化遺産データベースの企画－目録データと歴史資料－」『京都地域情報・文化遺産データベースの企画・展開・活用－明治期の「郡村誌」と近世村町別文書一覧－』2013年、1頁。本稿の 1 は、「京都地域情報・文化遺産データベースの企画－目録データと歴史資料－」をもとに、新規情報を含めて改稿したものである。

[2] 長野県、「信州デジくら」（http://digikura.pref.nagano.lg.jp/）。以下WEBはすべて2013年6月9日確認。

という意味が込められている。対象施設は県立歴史館、県立長野図書館、信濃美術館・東山魁夷館が所蔵する作品、歴史的な資料であり、画像と目録が掲載される。その他、県が作成した伝統芸能や祭礼、産業などの映像資料である。

検索手法は、キーワード、分野、資料種別、地域、年代、登録機関、県民投稿と７種類ある。検索結果は一覧表示以外に、グーグルマップを使用した空間表示、タイムラインを使用した時間表示など、いずれも多様である。

また「活用事例」のページがあり、学校や地域での学習として、県内全ての村絵図や郡村誌が公開されているので、地域の変遷を学習する資料として活用できるとある[3]。しかし「郡村誌」は活字に近い読みやすい文字ではあるが、画像のみでは活用しにくい史料といえ、テキスト化が必要である。この他、「県民投稿検索」があるが、「県民の皆様から寄せられたお住まいの地域の魅力ある文化、次世代に伝えたい画像や動画」と投稿募集案内にもあるように、投稿は映像を使った民俗祭礼、史跡紹介が多い。

・「デジタル岡山大百科」　テキスト掲載、住民参加

岡山県立図書館が運営する「デジタル岡山大百科」は３部門で構成される。このうち「郷土情報ネットワーク」は、岡山県に関する郷土情報の総合情報拠点として、郷土情報を一括検索できるシステムである[4]。県立図書館を中心とした郷土資料のデータベースで、「和装本」と分類されたなかに、一部古文書を翻刻したデータも掲載している。しかしそれらは「翻刻済みのものの一覧」で確認し内容を閲覧するのみで、翻刻文の検索はできない。また「郷土情報募集」として、岡山に関するビデオ映像、音声、写真（ホームページ）などを募集している。それらの多くは音声付きの絵本である「デジタル絵本」として民話などが公開されている。

・「北摂アーカイブス」　住民参加

「北摂アーカイブス」は、写真資料が中心であるが、目的は、北摂地域に散在する記録を収集、整理し、電子データとして保存、ホームページとして編集して広く地域の住民へ公開するとある[5]。特徴的なのは収集された写真を、市民ボランティア「地域フォトエディター」が整理、保存、公開に携わることである。自分たちの生活に近い画像資料であるため、このような取り組みが可能である。このボランティアの活動を、箕面市立図書

---

[3] 長野県企画部情報統計課、「活用事例」（http://www.pref.nagano.lg.jp/kikaku/josei/da/home/top/index.html）。

[4] 岡山県立図書館、「デジタル岡山大百科」（http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/）。

[5] 豊中・箕面地域情報アーカイブ化事業実行委員会、「北摂アーカイブス」（http://wiki.service-lab.jp/lib_toyonaka/）。

館、豊中市立図書館が支えている[6]。

・「地域の本棚」テキスト掲載

香川県立図書館「地域の本棚」では、ボランティアにより自治体史をはじめとする地域図書の目次、史料編の細目次、一部本文のテキストを掲載している[7]。著作権保護のため、ほぼ目次のみの掲載である。「地域の本棚」実施要項によると、2001年に施行されており、長期間にわたる取り組みであることがわかる。収録範囲は、県や県内市町の行政資料、郷土誌（史）、文学作品、紀要、新聞・雑誌の索引類等とあり、これらをNDC分類している。各目次は独立しているため、横断検索などのデータベース機能はない。

・「えひめ資料室 郷土資料リンク集」「えひめの記憶」収集範囲、テキスト掲載

愛媛県立図書館のえひめ資料室が運営する「郷土資料リンク集」は、県内外各機関の所蔵するデジタルデータのリンクを掲載している[8]。なかでも最大規模は、愛媛県生涯学習センターのデータベース「えひめの記憶」である[9]。ここでは、1991年度から現在までの「ふるさと愛媛学」調査研究報告書、一部の『愛媛県史』、各市町村誌を、地域学資料と位置づけ、本文をデータベース化している。本文を、キーワード、地域やテーマなどから検索可能とし、書籍に掲載した画像なども閲覧できる。『愛媛県史』は全巻目次を閲覧できるが、地誌、社会経済、民俗など一部の冊子は、本文検索可能である。

この他、東温市立図書館の地域資料PDF、愛媛大学図書館の幕末から明治前期の米山日記の画像データ等へもリンクしている。現在の地域資料も収集され、各自治体の広報、（公財）えひめ地域政策研究センターの雑誌などが含まれる。県外では、国立国会図書館「デジタル化資料」の「愛媛県学事年報」画像、国土地理院「国土変遷アーカイブ空中写真閲覧システム」など、愛媛に関するデータを持つ機関を細かく把握し、収集範囲を広げている。

2．村上節太郎写真コレクションと愛媛県歴史文化博物館

つぎに愛媛県歴史文化博物館が所蔵する、村上節太郎写真コレクションについて紹介

---

[6] 北摂アーカイブスについては、西口光夫「地域情報は住民のなかにある　北摂アーカイブスの成り立ちと展望」『デジタル文化資源の活用』勉誠出版、2011年参照。

[7] 香川県立図書館、「地域の本棚」（http://www.library.pref.kagawa.jp/kgwlib_doc/local/local.html）。

[8] 愛媛県立図書館、えひめ資料室、「郷土資料リンク集」（http://www.ehimetosyokan.jp/contents/ehime/kyodo-link.html）。

[9] 愛媛県生涯学習センター、「えひめの記憶」（http://ilove.manabi-ehime.jp/system/regional/search.asp）。

する。愛媛の地理学者であった村上節太郎（1909〜1995）は、昭和期を通じて膨大な写真を撮影した。現在、写真の寄贈を受けた愛媛県歴史文化博物館で、調査研究が進んでいる。その写真の内容は、昭和４年（1929）年以降、フィルム（ネガ・ポジ）25万686コマ（2012年9月現在）、プリントをあわせると推定36万である。撮影地も、愛媛を中心に日本国内はもとより、戦前の満州、戦後の世界各地にわたっている。民俗学者宮本常一が昭和30年代以降で10万コマ、地理学者石井實が昭和20年以降で30万コマと比較しても、撮影枚数、期間、内容ともに最良の史料群といえる[10]。

村上節太郎の写真・研究資料以外の図書は、愛媛県立図書館に寄贈され「村上節太郎文庫」が開設された。解説によると[11]、村上節太郎は明治42年（1909）愛媛県喜多郡天神村（現在の内子町）平岡に生まれた。昭和10年（1935）東京文理科大学理学部地学科（地理学専攻）卒業。愛媛大学などで地理学教員として愛媛の教育に尽力、郷土誌の研究や産業等の振興にも努め、平成7年（1995）死去とある。10万点の図書資料は県立図書館に、その他の写真・雑誌・研究用資料・生活用具等は、愛媛県歴史文化博物館に寄贈された。資料の内容は、地理学、郷土誌、農業、都市開発、和紙、移民、凧、塩など、幅広い関心がうかがえる。

愛媛県歴史文化博物館では、2002年の寄贈受入以来、写真を整理しながら、展示や図録・資料目録などにまとめ公開している。その最初の成果は、2002年7月の企画展の図録『昭和の街かどーカメラがとらえた戦後松山ー』である[12]。戦前から戦後の松山の写真を撮り続けた菓子店主山内一郎と、村上節太郎の両者の写真から、戦後の松山をテーマ別に紹介している。つぎに2004年7月に松山市周辺を取り上げた図録『村上節太郎がとらえた昭和愛媛』である[13]。章構成は「戦前戦後の松山／町並みの今昔／港のにぎわい／景観へのまなざし／暮らしの記録／商いの記録／特産物の記録」となっている。そして論考・資料として、井上淳「村上節太郎がとらえた昭和愛媛」、平井誠「村上節太郎略年表」が収録される。この図録は村上節太郎の写真が本格的に紹介された最初である。そして2006年12月テーマ展の図録『海と島に生きるー昭和・暮らしの記録ー』である[14]。これまでと同様、村上の写真を瀬戸内海の海や島での生活を主題に、それぞれのテーマ別に構成している。内容は「忽那諸島の姿／芸予諸島の姿／港町のにぎわい／海辺の情景／なりわい

---

[10] 井上淳「事例報告３　村上節太郎写真から見えてくるもの」『民具研究』146号、2012年。

[11] 愛媛県立図書館、えひめ資料室、特別コレクション、諸家文庫、「村上節太郎文庫」。（http://www.ehimetosyokan.jp/contents/kohosi/kanpo/06-3.pdf）。

[12] 愛媛県歴史文化博物館『昭和の街かどーカメラがとらえた戦後松山ー』2002年。

[13] 愛媛県歴史文化博物館『村上節太郎がとらえた昭和愛媛』2004年。

[14] 愛媛県歴史文化博物館『海と島に生きるー昭和・暮らしの記録ー』2006年。

の海／さまざまな船／はたらく女性／海の子どもたち／海と祭り」である。最後に、2012年資料目録として刊行された『村上節太郎写真資料目録（白黒ブローニー版／愛媛県西宇和地域）』である[15]。ブローニー版のカメラを使って、昭和11～32年までの愛媛県西宇和地域（八幡浜市、伊方町、西予市三瓶町）を撮影した写真109点を収録している。

これらの図録、資料目録の解題を執筆し、中心になって整理、調査、研究を進めてきたのが、井上淳専門学芸員である。同氏は、2007年4月から、学芸員のブログ「研究室から」に「村上節太郎写真」33回、「写真で見る昭和の暮らし」10回と、村上写真の解説を執筆している[16]。また2011年10月、第36回日本民具学会大会「宮本常一没後30周年記念シンポジウム「宮本常一写真による生活文化研究」」において、「村上節太郎写真から見えてくるもの」と題して、事例報告を行った[17]。宮本常一写真コレクションとの比較から、村上節太郎写真の重要性を提示している。

このように膨大な村上節太郎写真コレクションは、現在、着実に調査研究が進められており、「地域環境史誌編纂」に重要な意義をもつと考えられる。

おわりに

本稿では、「地域環境史誌編纂」に関する先行事例として、長野、岡山、愛媛など各地のデータベースと、愛媛県歴史文化博物館の村上節太郎写真コレクションの現状を紹介した。「地域環境史誌編纂」には、地域の博物館、資料館、文書館、図書館をはじめ、史談会や研究会、在野の研究者の協力が不可欠である。そのためには、先行する県立図書館などのデータベースを分析し、どのような地域情報を収集し、どのように公開しているか、どの範囲を収集しているかなど、検討していく必要がある。

---

[15] 愛媛県歴史文化博物館『資料目録21集　村上節太郎写真資料目録（白黒ブローニー版／愛媛県西宇和地域）』2012年。

[16] 愛媛県歴史文化博物館、学芸員のブログ「研究室から」（http://www.i-rekihaku.jp/gakublo/category/kanzou）、一部大本敬久専門学芸員執筆分も含まれている。

[17] 前掲、「事例報告３　村上節太郎写真から見えてくるもの」。